

結核性ぶどう膜炎の臨床像と治療の検討

多田明日美,岩橋千春,中井慶,南場研一,岡田アナベルあやめ,慶野博,高瀬博,福田祥子,後藤浩,白井嘉彦,蕪城俊克,水木信久,安積淳,園田康平,武田篤信,大黒伸行
日本眼科学会雑誌. 2021 125(4):415-424.

目的：日本における結核性ぶどう膜炎の臨床像と治療内容を明らかにすること。
対象と方法：多施設後ろ向き研究にて 2001 年 1 月～2012 年 12 月の間に結核性ぶどう膜炎と診断された 130 例 192 眼の年齢, 性別, 臨床所見, 結核菌感染の検査法, 治療について検討した。
結果：130 例中, 男性 78 例(60%), 女性 52 例(40%)で, 年齢は 48.5 ± 16.7 : 20~88 歳 (平均値±標準偏差: 範囲)であった。192 眼中, 11 眼(5.7%)が前部ぶどう膜炎, 92 眼(47.9%)が後部ぶどう膜炎, 88 (45.8%)が汎ぶどう膜炎であった。眼所見では網膜血管炎 142 眼 (74.0%), 硝子体混濁 89 眼(46.4%), 前房炎症 88 眼(45.8%), 網膜滲出 73 眼(38.0%)であった。結核菌感染検査ではツベルクリン反応 123 例(94.6%), インターフェロン- γ 遊離試験 (IGRA) 83 例 (63.8%)の順に実施率が高く, 陽性率はそれぞれ 95.2%, 75.9%であった。108 例(83.1%)で抗結核薬が投与され, うち 41 例(38.0%)で副腎皮質ステロイド内服が併用された。全身結核病変を合併していた症例は 14 例(10.8%)であった。
結論：結核性ぶどう膜炎で多い臨床像は網膜血管炎, 硝子体混濁であった。全身結核病変を合併していた症例は 1 割と少なく, 臨床像が多彩な結核性ぶどう膜炎の診断にはツベルクリン反応や IGRA が重要であると考えられた。

日本眼科学会雑誌(2021 年 4 月号掲載)を転載